

学 会 報 告

日本村落研究学会 第52回(2004年度)大会

市田 知子

日本村落研究学会の前身は村落研究会といい、そのため現在でも村研(そんけん)と略称される。戦後間もない頃、福武直をはじめとする社会学者が農村社会の民主化のために調査研究を盛んに行っていたが、当学会の設立も同時期に遡る。

村研大会は例年、交通の便が決してよいとはいえない、ど田舎の宿泊付き施設で開催される。これは第一回の煙山大会からの伝統のようである。多くの学会大会は勉強をする場にとどまるが、村研の場合は宿泊も兼ね、かつ相部屋なので、時として学会の大御所と寝食をともにすることになる。なにかと気が抜けないが、一方で偉い先生とも親しくお話ができ、また個性豊かな会員についての面白おかしい逸話が誕生し、伝承される場ともなる。

さて、第52回(2004年度)大会は、昨年11月12日から14日にかけて茨城県鹿島郡旭村、涸沼(ひぬま)のほとりで開催された。12日は役員会、13日は個別報告16題と地域セッション「金砂神社磯出大祭礼と『むらの底力』 72年に1度の祭礼はいかに成立したか」、14日はテーマセッション「消費される農村 現代農村研究における方法論的フロンティア」と続いた。以下、筆者も報告を行ったテーマセッションの概略を述べることにする。

座長の秋津元輝氏(奈良女子大学)による「かつての家 - 村論に代わりうる農村研究の方法論は何なのか」という問題提起を皮切りに、当所の立川雅司氏による解題は、従来の農村研究が農村社会内部の分析にとどまってきたのに対し、農村の外部からの「まなざし」による農村側の変化に着目する意義が高まっていることを、イギリスの農村地理学を手がが

りに示した。続く矢部賢一氏(東京都立大学大学院)による第一報告「体験される農村

ポスト生産主義の視点から」は、「ふるさと体験ガイド」や栃木県の都市農村交流や農村体験を事例に、「ポスト生産主義」的な農村がいかに構築されるかを示した。土居洋平氏(地域交流センター)による第二報告「仕掛けられる地域づくり 地域活性化のなかでの「外部」と「内部」」では、新潟県中越地方を事例に「地域づくり」を仕掛ける側と仕掛けられる側の関係性を問うた。谷口吉光氏(秋田県立大学)による第三報告「食の安全性に関する認識と産消関係 農産物を中心に」は、1970年代以降の食の安全性に関する認識の変遷を、産消提携、生協産直などの生産者 消費者の関係性を軸に分析した。最後に筆者は第四報告「農村「地域」の再検討 日欧の農村地域開発の比較の視点から」として、政策側の「まなざし」が農村「地域」を対象化しつつも、近年では「主体」形成を促していることを日欧の事例に即して述べた。

討論では、これから農村を研究する上での基本概念として提示された「まなざし」や「ポスト生産主義」に質問が集中した。現場の人たちと試行錯誤を重ね、中山間直接支払いなどの政策提言を行っている「現場型」の研究者は、都市住民や役所からの勝手な「まなざし」が農村に向けられ、農村の人々を振り回していることこそ問題であると主張する。山間地には高齢化、過疎化が進み、やがて消滅するであろう集落が厳然としてあり、そのことを度外視して「ポスト生産主義」の時代だからといって、「まなざし」に応じた「仕掛け」をつくるなどとのんきなことが言えるのか、という忠告でもある。

「まなざし」に関して言えば、フーコーや、その昔の実存主義の「まなざし」は規範が内在化する状態を含み、むしろその状態こそ問題視するのだが(異常者はなぜ異常者に「つくられるのか」というように)、それを援用した農村地理学者や農村社会学者はきわめて中立的な意味に脱色したようだ。この援用が今回のようなすれ違いを招く一つの要因になっているように筆者には思えた。